

コラム

腰折れ文一、

渡邊澄子（会員）

第一回は何を書こうかな。東京の猛暑を逃れて七月十二日から五日間女神湖畔の別荘に行ってきた。ここは俗化された白樺湖畔とは異なり、静かで風光明媚な快適な地なので、往復約三五〇キロの道程を一人での運転も苦にならない。友人たちは、高齢者運転は危険だからもう止めよ、と口繁く忠告してくれるが、車無しでは不便だし、ここを処分してしまう気になかなかなれない。ついこの間免許更新で他の七〇代男性たちが七〇点位だったのに対して私一人が九〇位の「優良」で褒められたのを威張ったら友人からやっぱりもう止めろと言われてしまった。

この別荘は、別荘なんて高嶺の花だったのに、長くなるので省くが、その気も無いのにマンガチックな形で買うことになってしまったのだ。もう三〇年前のことである。四〇〇坪の土地に春はレンゲツツジが一面に咲き、三五本の白樺の大樹、やまほうしの白い花等々、庭から摘み取った山菜の天麩羅も乙だ。今回は樺太旅行の事前勉強の意味もあって五〇二頁もある李恢成の記録文学『サハリンへの旅』を読み切ってきた。李恢成は真岡（現ホルムスク）に生まれ、樺太・サハリンから北海道に引き揚げてきた作家だ。作品も人物も大好きで「李恢成論」も書いている。一緒に飲んで帰りは家まで送って貰ったこともある。戦後三四年経ってやっと果たした長年の願望だった「パルチャ（運命）の旅」を詳細に記録したのだが、『国民文学』論その他で、ここ数年來、日本

の「負」の歴史の検証を論文として書き続けている私にとって大日本帝国の侵略の歴史とこの本は繋がっていて改めて多くの知識を得られた。大好きな矢田津世子が「チエホフに学べ」と自己叱咤した日本文学に影響大のチエホフの文学館に樺太旅行で行きたいなあ。

山荘滞在が長いほど帰宅後が大変。お金もないくせに『朝日』『東京』『琉球新報』三紙を視点的比較上とっていてそれに眼を通し必要部分を切り抜く作業に二日はかかる。山で見るテレビのニュースの情報はなんとも薄っぺらだ。

この五日間は「加計」問題と中国の民主活動家劉曉波氏の危篤から死迄の記事に溢れていた。中味は真逆だが怒りにとらわれた。森友問題はこうなってしまうのだらうか。「教育勅語」を園児に唱和させるなんて呆れて言葉もない。戦争への道に進んだ根源なのに。首相はこの教育理念に賛成。バツカじゃないか。

原稿・写真など大募集

会員の皆様から、原稿・写真などを幅広く募集いたします。

「みんなの写真館」

表紙および裏表紙の写真や絵画などを募集します。写真についての短いコメントも付けてください。思い出の写真、珍しい写真、力作の写真、ペット自慢、お孫さん自慢なんでもお待ちしています。

「旅行記」「体験記」「書評」

「詩」「小説」など

多様な原稿を募集いたします。

9月号より、編集部体制で「善隣」誌の編集に当たります

会員の皆様にご協力いただけるよう試みていきます。原稿の長さ、書き方、方法等お気軽にご相談ください。事務局にお伝えいただければ、追って編集部からご連絡をさせていただきます。

（編集部）